中原　泉
一枚の写真
50

最高の口腔外科医 ― 加藤譲治

加藤譲治は，昭和49年（1974）３月，群馬大学から新潟歯学部の口腔外科学教室第二講座の教授として着任した。第一講座は西村恒一教授が主宰して，新潟歯学部開校の昭和47年にスタートしていた。加藤は本学49回卒，エネルギッシュな38歳の巨漢だった。彼の医局は，まだ彼一人であった。

まず加藤は，県市内の病院を巡り，外科や耳鼻咽喉科に一々名刺を置いてまわった。彼は何をやっているんだ？ と，皆いぶかしがった。名刺配りが終わる頃には，ポツポツと表敬した病院から本学口腔外科へ紹介患者がきた。また，幾つかの表敬病院から，加藤に手術依頼のお呼びがかかった。

新潟県立がんセンターでは，院内の医師たちが彼の初手術を見学にきた。見学室のガラス越しに，お手並み拝見というわけだ。近くの信楽園病院から，患者の舌出血が止まらないと救急要請をうけ，駈けつけて，いとも容易く止血してみせた。

彼の行動は，他院の手術要請に応じるだけではなかった。他院での手術が10例あれば，２，３例は本学口腔外科へ転院させた。実は，患者の誘致が狙いだったのだ。

次の加藤の目標は，信頼をえた病院の口腔外科に，医局員を医長として送り込むことだった。10年足らずして，市内外の主な関連病院の口腔外科は，本学で占められた。

加藤は大きな手術の前日には，（口腔の解剖は熟知しているのに），決まって顎顔面口腔の解剖図譜をなぞった。彼はがんセンターの耳鼻咽喉科医と組んで，頚部廓清した舌・口腔底の粘膜面・下顎骨の切除面のバックリあいた手術創面に，前額部の皮膚を剥離した大型有茎皮弁を，口腔外の頬骨弓上縁の切開部位から挿入し，口腔内へ皮弁を誘導して，大きな欠損部全体を補填し再建する同時再建手術に先駆した。

私は，７時間半におよぶ拡大根治手術に衝撃をうけた。患者の額の皮膚弁を頬骨弓切開部から口腔内へ導入する移植手術法は，まさに奇想天外であった。執刀医のどちらが医師か歯科医師か区別がつかないほど，手術は力まず手際よく進められた。これが歯医者のやるオペなのか，と私の口腔外科医観が一変した。― 最高の口腔外科医に出会ったと察した。

私は昭和56年（1981）に，口腔外科という医歯のGrenzgebiet 問題を提起した『現代医歯診療圏－Grenzgebiet の構図』を著わした。そこに登場する口腔外科医は，加藤がモデルであった。私と加藤は，互いに啓発され共鳴し共に高めあった。

一方，彼は，学生部長，教務部長，病院長，歯学部長，法人理事等の要職を歴任した。医科病院の開院，新潟専門学校の開校，新潟短期大学の開校，華西医科大学口腔外科との連携，大学院新潟歯学研究科の開設等々，新潟歯学部の創設期をブルドーザーのように牽引した。

その頂点にあって加藤は，平成６年（1994）３月17日，肝臓がんのため58歳11ヵ月で逝去した。その朝，私は医科病院の加藤病室内に立ち竦んだ。昼，東京の年度末教授会の最中，新潟からの訃報を聞いた。在職20年，全身麻酔下での執刀手術は2,500件，その30％が悪性腫瘍であった。

私は，“譲治さん”と呼んだ余人に代え難い人を失った。

（10年間にわたって連載した「一枚の写真」は，今回をもって終了します。ご愛読いただいた方々，編集に携わってくださった方々に感謝いたします。）